

ふるさと再発見

～重源上人の里 みてある記～

（一）ほうこうじ 法光寺

「重源の里みてある記」のペンをとるにあたり、先ずわが法光寺から案内します。

平成二年一月法光寺阿弥陀堂（上人堂）の本尊阿弥陀如来像と、東大寺南大門の国宝の金剛力士像の年輪成長パターンが、同じ徳地産の桧材で造られていることが奈良国立文化財研究所から発表され、テレビや新聞で全国的に報道されたのをきっかけに、「重源の里」のまちづくりが誕生しました。

法光寺は、文治二年（1186）四月に東大寺再興のため、用材採収の杣山として周防国があてられ、大勧進俊乗房重源上人が、杣事業の拠点として創建された寺で、蓮台山安養寺と号しました。

安養寺は、現在の字安養地全域を境内地とし、本堂には、重源上人が宋国の帝王から拝領されたと伝えられている、赤梅檀の



法光寺阿弥陀如来坐像

大日如来像が秘仏として安置され、のちに薬師如来を前仏として祀られました。現在は本堂新築を期に曹洞宗の本尊、釈迦牟尼仏と高祖道元禅師・太祖瑩山禅師の尊像を安置しています。

重源上人は、自ら南無阿弥陀仏と号されたほど阿弥陀信仰をされた方で、当寺には、「南無阿弥陀仏俊乗上人」と記したお位牌があり、この地域を阿弥陀如来の安養浄土となすべく安養寺と名づけ、

間口九間、奥行七間の大伽藍を建立し、阿弥陀如来座像と観音菩薩と勢至菩薩を中心に不動明王と毘沙門天の五体の仏像を安置されました。この五体の仏像は山口県指定文化財です。

堂内の厨子には上人ご自作と伝えられる重源上人像が安置され、後ろの壁板には上人直筆の大梵字が残っています。現在は三間に二間のお堂に縮小していますが、柱や天井板、壁板、台座板などには当初の用材が残っています。

旧境内地には、塔頭の七坊が点在し、三か所は今も当寺の飛び地で残っています。

平成四年には、「重源の里」づくりで、法光寺横に駐車場と公園が造られ、法光寺も「重源の里」の拠点としての大役を担っています。この年に「東大寺サミット」が山口県引き受けでありました。